（別紙２）

# 審査の結果の要旨

氏名　木下華子

本論文は、中世の代表的作家鴨長明の文業につき、とくに歌学・和歌作品の側面を中心として分析・考察したものである。まず冒頭の「序」において、鴨長明の略歴を概観し、本論文の意図を明確にしたうえで、その後、本論を三部十章に分かつ。

第一部「『無名抄』」は、長明の歌学書『無名抄』に関する三つの章から成る。第一章は、これまで体系だった伝本研究のなかった同書につき、十四の主要伝本を精査して、新たな系統分類を提出した。第二章は『無名抄』の「セミノヲガハノ事」の章段を精読して、これが『袋草紙』雑談に見える歌話のプロットを借りた演出性の強いものであると指摘し、『無名抄』を単なる歌壇史資料や自讃の書としてではなく、緻密な構想をもった自己実現の文学として読み解く新視点を示した。第三章は『無名抄』中でもこれまでも最も注目されてきた「近代歌躰」の章段を取り上げ、これをその直前の「式部赤染勝劣事」と連続させつつ精読することによって、この章段の「幽玄」の語が、「中比の躰」と「今の世の歌」を古今集のもとに位置づけ直し、その対立を解消させようとする意図で用いられていることを明らかにした。「幽玄」の語を、和歌史を叙述するための機能的役割の側面から捉え返す斬新な論である。

第二部「和歌」は長明およびその周辺の和歌に関して考察する。第一章は、特異な表現で知られる源俊頼の「恨躬恥運雑歌百首」の享受に関しての論で、その摂取が、俊頼の息であり長明の師である俊恵を中心とする歌林苑の歌人たちの紐帯の証しとなっていたことを指摘する。第二章は長明の「正治二年後度百首」の和歌を細やかに分析することを通して、そこに「不遇なる山住み」という統一的な主体を構想し、それが後鳥羽院によって救われるという演出を施していることを読み込み、長明の他作品にも通じる、自己を物語化する表現意識を剔抉する。第三章は、長明の代表作として著名な『新古今集』一五二三番歌が『法華経』寿量品を踏まえていることを指摘した上で、これが長明の遁世を予言する歌であるという「物語」を描き出した『源家長日記』の記述は、長明の志向を反映するものであった、と論じる。

第三部「時代と表現」第一章は、長明の「数寄」の実態を『無名抄』『発心集』『方丈記』や同時代の諸家集を横断しながら分析し、そこに「跡を尋ぬ」という実見への志向が存在することを析出する。この時代の文学のリアリズムの由来の解明にも資する、重要な指摘である。第二章は、歌語「忍草」「忘草」「ことなし草」の語誌を精査し、その混同の経緯を明らかにする。とくに歌語が重なり合う過程を追求する方法に創意が見られる。ついで寂然の『法門百首』に注目して、これが寂超作『今鏡』「敷島の打聞」や『方丈記』に影響していることを新たに指摘し（第三章・第四章）、また『方丈記』に関しては、『源氏物語』と『紫式部日記』の摂取もあることを明らかにした（第四章）。

本論文は、鴨長明という重要作家の表現方法について、主として和歌の観点から、その周辺にも周到に目を配りながら実証的に分析を進め、多くの新見を提示している。『方丈記』や『発心集』に関してさらに考察が望まれるなど課題も存するが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。